

## 地方新聞記事にみる十勝沖地震津波

都司 嘉宣\*・行谷 佑一\*

### 1. はじめに

東京・銀座から新橋駅にかけての約1km四方の街区には、日本全国にある地方新聞の東京支局が集中している。ここでは、発行後2週間以内の新聞ならばたいがい購入することができる。われわれは、十勝沖地震が起きた9月26日から4日経過した9月30日に、今回の地震津波の影響を受けた東日本太平洋側に位置する県の各地方新聞の東京支局に出かけて各地の地方新聞を購入した。それらの地方新聞の記事の中から各地で地震、津波によってどのような被害が生じ、どのように目撃され、証言されたかについての記述を抜き出してみた。

なお、「岩手日報」の26日夕刊に、宮古市の県道・稲荷橋重茂（おもえ）線は赤前の釜ヶ沢地区で300mにわたって海水が浸水したという記事がある。この記事にもとづいて筆者らは、宮古湾の最奥部に位置する赤前地区、釜ヶ沢集落を2004年2月27日に訪問し、ここで聞き込み調査と現地測量を実施した。その結果もあわせてここに述べることにする。

### 2. 調査した地方新聞

調査した地方新聞は、北海道新聞（釧路版、札幌版、函館版）、東奥日報（青森県）、岩手日報、岩手日々、河北新報（主として宮城県）、福島民友、福島民報の7種類であり、いずれも26日から30日までの分である。以上のほか、茨城新聞、千葉日報も購入調査したが、この2紙には独自の記事は現れなかった。

本稿ではこれらの地方新聞の紙面から、気

象庁の発表をはじめ、すでに周知の公的な発表など、その地方独自の情報を含まない記事は捨てて、主として地方独自の記事を掲げることにする。

以下には、純粹に地震のみに関する記事は採用せず、津波、あるいは海岸河川、堤防に関する異変記事を掲載した。堤防の亀裂記事の大部分は地震動によるものと推定される。記事は地点別に東から西へ、北から南へ海岸線をたどる方向に配列した。同一地点で原紙面上別個の箇所、あるいは別の日付に現れた2個以上の記事を載せた場合には、斜線「/」で、それらの区切れ目を表記した。

### 3. 北海道の記事

北海道の記事は「北海道新聞」、釧路・札幌・函館版による。特に注記しないものは26日夕刊の記事である。

北海道では十七市町で1万3千人を対象に避難勧告が出された。

北海道電力によると、地震直後に36万世帯に及んだ停電は、最後まで停電の続いていた豊頃町で53戸が26日21時13分に復旧することによって、北海道全体ですべて復旧した。

水道管の破裂で豊頃、池田、浦幌、忠類の7316世帯で断水。浦河では全戸の70%に当たる4941世帯で断水。釧路町の漏水と、浜中町の断水は27日復旧の見込み。

26日の臨時休校は、釧路・十勝・日高の85小学校、50中学校、24高校、特殊学校3校であった。道内21校では下校時刻を繰り上げた。

（28日朝刊）道によると、道内の重軽傷者は572人となった。骨折などの重傷は43人の上っている。/道内太平洋沿岸45市町村のうち、津波危険図のない市町村が6割に達する。

\*東京大学地震研究所

標津川では堤防に長さ57mの亀裂を生じた。

根室港では水産加工場の重油タンクから油約1500リットルが岸壁に流出した。正午現在海面に長さ600m、幅50mにわたって広がっている。タンクの水抜きバルブのはずれと見られる。根室海上保安部で処理剤をまいた。

浜中漁協では海中に設置した籠やウニの種苗が津波の被害にあった。

釧路町仙鳳趾漁港で無人のカキ漁船2隻が転覆し、港内に油が流出した。

釧路市では午前9時3分に1.2mの潮位異常が観測された。／釧路西港第四埠頭付近では広範囲に液状化現象が見られた。岸壁の一部では最大30cm、長さ150mにわたって沈下した。／釧路西港に通じる道路では、コンクリートの割れ目から灰色の泥水がわき上がった。／

(29日夕刊) 第一管区海上保安本部釧路航空基地が26日の地震後9時38分、釧路西港第1埠頭の上空で空撮した映像に、直径380mの巨大なうずが発生していたことがわかった。津波によって狭い湾内に海水が入り出したことによってできたものと見られる(島村教授談)。／釧路市新釧路川では護岸が崩落した。

(つぎの1項目は「岩手日日新聞、27日」の記事) 大船渡を母港とする第28七福丸は釧路沖の震源から三十六キロの海域でサンマ漁の操業をしていたが、乗組員・富崎勝寿さんは、「二、三分ダダーという下(海底)から突き上げる感じがあり、はじめはエンジンの調子がおかしいのではと思ったが、地震だったんだねえ」と振り返る(海震記事)。

十勝管内では、岸壁の亀裂などで漁港被害13件。漁船の転覆流出が11隻、ウニ養殖施設など施設被害が5件あった。

十勝川河口橋では、橋と道路の境目に30センチの段差を生じた。／十勝川では堤防に十七カ所で亀裂を生じた。／十勝川下流の堤防上面には多数の亀裂が入った。浦幌町左岸堤防では8.8km幅は広いところで1mが被害を受けた。／(28日朝刊) 26日の地震で、十勝川流域の河川堤防に入った63箇所の亀裂のうち、9箇所の亀裂が洪水で水の達する可能性のある「計画高水位」の下にまで達している

ことがわかった。豊頃町の大津築堤では長さ5.8キロ、深さ1-3mの亀裂を確認した。同町では礼作別築堤で1箇所、十勝川支流の礼作別川でも3箇所、利別川、牛首別川、浦幌十勝川でも計4箇所が見つかった。／(29日夕刊) 北海道開発局は29日までに十勝川下流域の3カ所で液状化現象と見られる砂の噴出を観測した。堤防内部が空洞化し強度が落ちたおそれがあるとしている。／津波は十勝川河口から少なくとも11km上流まで達していたことが北海道開発局の水位観測所のデータからわかった。河口から11kmの浦幌町愛牛で26日5時50分、47センチの水位上昇が観測された。河口から9キロの旅来(たびこらい)でも同時刻に83センチ、河口から3キロの大津でも同5時半に118センチの上昇を記録した。

豊頃町大津港では、陸揚げ中の漁船が津波で台座からはずれて傾いた。／豊頃大橋付近の国道で、約100mおきに陥没、亀裂を生じた。近くの道道では、100mにわたって深さ30センチほどの亀裂を生じた。／大津運送会社(鈴木光夫社長)では、トラック3台収容の2階建て倉庫がべしゃんこになった。／大津港沖でサケ漁をしていた男性(60代)は「海の上でも大きな横揺れを感じた」と語った(海震記事)。／大津港では、約二十隻の漁船が岸壁の上までせり上がってきた津波で傾き、台座からはずれた。海面はゆっくり上昇してきた。／大津港コミュニティーセンターには住民二百人ほどが避難した。／(27日朝刊) 豊頃町大津地域コミュニティーセンターに六十人が避難している。川村重幸大津三区長は「大津で被害のない家はない。水道が使えずトイレが使えない。今後が不安である」と語った。／(27日夕刊) 27日午前9時現在避難しているのは豊頃町と浦河町の68人になった。／(29日夕刊) 29日13時の自主避難者は、豊頃町の29人、浦河町の2人の合計31人。／(27日朝刊) 豊頃町に釣りに出かけた行方不明の2人は津波にさらわれた可能性がある。十勝川右岸で2人の車が発見された。北海道警察は捜索を開始した。／(27日夕刊) 豊頃町で行方不明になった吉田政次郎さん

(69)と津田範之さん(66)の2人の釣り人の捜索は地元消防団員300人、海上保安庁のヘリを動員したが、27日13時現在いぜん行方不明である。／(29日夕刊)26日の津波にさらわれたと見られる、行方不明者(前述の2人に増田光男さん<66歳、帯広市西16南41>が加わる)3人は29日13時現在、依然として行方がわからない。／(28日朝刊)豊頃町大津で漁船の整備や修理をしている鶉橋鉄工造船所では、津波が造船所内に押し寄せ、プラズマカッターなどの機械が海水につかって使えなくなりました。「地震後造船所へ行ったが10分ちょっとで造船所の中に高波がやってきた。どうにもできなかった。」と社長の鶉橋重信さん(58)は語った。被害は数千万円に上る。／(30日夕刊)30日午前9時現在で自主避難者は豊頃町の35人。断水は豊頃町で632戸となっている。

広尾町では乗用車十数台が流された。／広尾漁港では漁業者は漁船を沖だしたが、沖出しが終わったところ津波が来襲し、同港の潮位は通常より2.5m上昇した。漁業者が乗ってきた軽トラックや乗用車十数台が海に飲み込まれた。／(28日朝刊)余震の続く27日、道の防災ヘリは広尾町沿岸で7人がサーフィンをしているのを発見した。また同町やえりも町で約100人が釣りをしているのが確認された。一帯は依然としてM7以上の余震が起きる可能性があり、それによる津波の発生も考えられるため、レジャーは控えるよう道は呼びかけている。

北大・東北大の合同津波調査団によると、津波の高さは大樹町晩成で4.49m、ホロカヤントウで4.42m、生花苗沼(オイカマナイト)で4.28m、大津漁港で3.24m、十勝港で3.50m、えりも町百人浜で4mであることがわかった。

えりも町の自営業飯田稔氏は「波が高くなりながら港に押し寄せてくるのがわかった」と語った。／(28日朝刊)「津波4メートル、えりも町(百人浜)で」、北大東北大合同調査班による津波浸水高さは、これまで発表されていた浦河港での1.3m、十勝港での2.53m

(5時24分)より大きく上回っていたことがわかった。

浦河港では午前6時24分に道内で最大の1.3mを記録した。／浦河では磯舟三隻が転覆した。／(28日朝刊)浦河静内の両漁協では、マツカワ(タカノハガレイ)の稚魚約1000匹が死んだ。地震後1時間ほどの停電によって酸素導入機が停止したためである。

苫小牧での原油貯蔵タンクの炎上の原因は、三万キロリットル(直径43m、高さ24m)のタンク同士を結ぶ配管に生じた亀裂が火元となったものか?この配管と、海上棧橋(シーバース)とをつなぐ輸送管にそれぞれ亀裂が入った。同精油所で出火したタンクのほか別の二つのタンクで油漏れが見つかった。／

(29日夕刊)苫小牧市真砂町出光興産北海道精油所のナフサ貯蔵タンクは28日午前出火、炎上して火災が続いている。直径43m、高さ24mの鋼鉄製で、500度を超す熱のため開口部から溶け始め、倒壊が始まった。／(30日朝刊)出光苫小牧タンク火災は44時間ぶりに鎮火した。／苫小牧港ではフェリーの着岸が10時間以上遅れて、16時50分の着岸となったため、一部で配送の1日の遅れを生じた。

北海道電力函館支店によると、道南地方のほぼ全域で、4万8千8百戸に停電が起きた。

1時間ほどで復旧した。

函館では函館消防署西消防本部が市内3カ所で潮位測定をした。津波の影響で水産物地方卸売市場前の道路のマンホールのふたが海水の逆流で持ち上がり、周囲にゴミが散乱した。／函館市住吉漁港近くで2人のサーファーに警告し、海岸に戻させた。／函館市交通局は市電レールの点検をしたが異常はなかった。／函館市水産物地方卸売市場の荷さばき場の建物出入り口アスファルト部分が陥没。3センチほどの段差ができた

#### 4. 青森県の記事

「東奥日報」による青森県内の記事は次の通り。

26日正午現在、青森県で目立った被害は報

告されていない。

(27日朝刊)青森県防災消防課26日午後2時のまとめによると、青森県内で人的な被害はなし。下北南部8ヶ町村で、病院や学校のガラス割れ、壁のはがれなどの被害が10件出た。

東北電力青森支店によると、26日午前4時51分西津軽郡稲垣村沼崎、沼館、豊川地区など1340戸で停電が発生。6時37分に復旧した。

むつ市関根浜では午前7時47分に最大50センチメートルの津波を観測した。／むつ市関根浜漁港では午前7時10分ごろには漁港の入り口から波が押し寄せる様子が確認できた。／むつ市消防本部によると、大畑町正津川で民家のホームタンクが倒れ、灯油約100リットルが漏れだした。同町の男性は「6時すぎの二度目の地震でたくさんのものが倒れてしまった」と語った。

六ヶ所村核サイクル施設には異常はなかった。

八戸では午前8時17分に最大1メートルの津波を観測した。／(27日夕刊)八戸市の県立海洋学院の実習用定置網が津波によって全損した。／(以下岩手日報の記事)八戸市では午前5時44分に60センチの津波第一波を観測。午前8時17分には最大波1メートルを観測した。八戸海上保安部では巡視艇を出動させ沿岸部を調査したが異常はなかった。

## 5. 岩手県の記事

岩手県では「岩手日々新聞」と「岩手日報」の2紙がある。この2紙から記事を拾い集めると次のようになる。なお、宮城県を主要な基盤とする「河北新報」も若干岩手県の情報を載せている。「岩手日報」の項目に併記することにする。

[岩手日々新聞, 27日]

宮古市、陸前高田市の県道や、八戸自動車道の一部区間で一時通行止めの措置がとられたが、夕方までに解除された。

岩手県沿岸部では津波警報が発令され、気

象庁の潮位計により、宮古市で60センチ、釜石市で50センチ、大船渡市で20センチの津波が観測された。

田野畑村はじめ八市町村では271人が集会所などへ避難した。

田野畑村では避難勧告が出され、65人が避難した。このほか自主的に久慈市や野田村など7市町村で206人が一時避難した。

陸前高田や宮古など沿岸四市町では、カキやホタテの養殖施設に被害が発生した。

大船渡、陸前高田、山田の三市町の21小中学校で臨時休校の措置が執られた。

[岩手日報記事] (26日夕刊)

各市町村の潮位観測システムや目視情報による最初の潮位変化は、田老町60cm、久慈市小袖50センチ、野田港50センチ、普代村太田名部50センチ、岩泉町小本港50センチ、田野畑村島ノ越50センチ、山田町船越42センチ、釜石港40センチ、陸前高田市只出30センチ、大船渡港20センチ、大槌漁港20センチなどであった。

種市漁港では午前5時6分に30センチの潮位変化が観測された。午前5時50分までに沿岸13町村すべてで第一波が観測された。／種市漁港では防波堤の上から消防署員が六人態勢でラジオを聞きながら潮位の変化を監視した。同漁港では潮位は最大で70センチに達した。

久慈市の観測計器では、午前7時25分に玉の脇漁港で132センチの最大波を確認した。久慈市では午前五時に防災無線で自主避難を広報した。湊町の高台の神社には約50人が集まった。同町の佐々木孝一さんは「揺れが長く気持ち悪かった」と不安げ。

田野畑村では午前四時56分、防災無線を通じて島越、羅賀地区の沿岸にすむ五百世帯に避難勧告を出し、70人が避難した。5時40分ごろ監視カメラで潮位の急速な変化(1メートルほどの引き潮)が確認されたため、再び海岸付近住民に避難勧告が発令された。避難勧告は7時15分に解除された。海沿いの道路は消防団員が交通規制をした。ホテル羅賀荘の宿泊客約百五十人は一時5階に移動した。

大きな被害は確認されなかった。／田野畑村では五百所帯に避難勧告が出た。久慈市や田老町の住民は高台や集会施設に自主避難。漁船も沖に避難。水門が閉鎖された。

宮古測候所は5時44分、宮古湾で約60センチの潮位変化を観測。

宮古市津軽石中学は授業を一時間遅らせた。海に面した白浜地区の生徒12人は自宅待機が続いている。赤前地区の水門を閉鎖しようとした消防団員の男性(56)は足を負傷し病院に運ばれた。

宮古市の閉伊川河口付近は、26日午前5時45分頃第一波と見られる津波が来襲し、上流に向かって逆流現象が起きた。河口付近にある宮古大橋の耐震工事のため、業者が上流の同市向町の宮古橋に設置した潮位計は、5時53分頃水位が70センチ上昇。6時すぎには一転、下流に向かって激しく流れ出し、六時五分ごろには水が干上がって川底が現れた。しかし30秒後にはふたたび逆流を始めた。宮古橋付近ではゴーという音とともに何度も上げ潮下げ潮を繰り返した。住民らは堤防の内側から川の状況を見守り、「河口でこんなに音を立てて水が流れるのは初めて見た」と不安げに語っていた。／宮古市閉伊川に宮古漁協が設置しているサケの川留め漁の網が津波で川が逆流した影響で、幅100メートルにわたって倒壊した。／県道重茂(おもえ)半島線(宮古市稲荷橋一堀内、約3km)は、津波警戒のため通行禁止となった。釜が沢地区で約300m冠水した。(以下「河北新報」の記事)岩手県宮古市赤前地区では県道が5センチほど冠水した(第8節参照)。

／(27日朝刊)宮古市では宮古湾の牡蠣養殖施設300台を直撃。「半分はやられたのでは」(宮古漁協)とみられる。／(28日朝刊)宮古市水産課のまとめでは、カキ、ホタテの養殖棚計326台のうち大破は263台で80.7%。残り63台は中小破。1994年の北海道東方沖地震の時には350台が大破し被害額は2億七千八百万円だった。宮古市水産課の小野寺繁樹係長は「施設撤去、復旧支援などを検討したい」としている。

山田町の大沢漁協によると、浜川目地区などのカキやホタテの養殖棚約40台に被害が出ている模様だ。道又純総務課長は、「潮位の変化を受けやすい山田湾の北部を中心に被害が出ているようだ。被害確認や復旧はこれからだが、カキの出荷が始まったばかりで心配だ」と語った。／(27日朝刊)山田町大沢の浜川目では、特産の一粒カキの本格出荷の前にカキ、ホタテの養殖棚が次々に損壊。養殖棚は通常約100メートルの延縄が約20メートル間隔で並ぶが津波で押し流された。

(つぎの1項目は「河北新報」の記事)岩手県釜石市両石町の漁業関係者(56)は、午前5時前、漁港の水門を閉めて来たたら漁港に流れ込んでいる川の水がごうごうと音を立てていた。津波の前兆だったのだろう。

釜石漁港の水門を管理している新浜町では住民50人が水門21基を閉鎖した。釜石海上保安部によると、午前5時48分に確認された第一波が40センチで最大波であった。／釜石市大平町の県オイルターミナルは地震による被害はなかった。

大船渡市では50人が自主的に避難した。午前5時49分に約20センチの潮位変動を観測した。大船渡振興局土木部によると港湾や道路などの被害はない。／(27日朝刊)大船渡湾では赤崎漁協のホタテやカキのはえなわ式養殖設備80台が壊滅。ロープが切られたりブロックが動くなどして団子状に絡まり漂流した。被害額は四千万円以上になると見られる。同漁協では「無傷の設備はなかった」としている。

陸前高田市の潮位観測システムによると、午前7時35分に小友町の両替漁港で90センチの津波を観測した。沿岸地域の小中学校11校の児童生徒は注意報解除まで自宅待機となった。／(27日朝刊)陸前高田市では広田湾奥の小友町周辺の養殖施設に被害が集中した。小友漁業協同組合員所有のカキ、ホタテの養殖施設約480台のうち「7割程度に影響が出ている模様」(同漁協)で被害額の把握には数日かかる見通し。小友町瀬沢沖の海上からは養殖イカダが整然とならぶ光景が消えた。ロー

ブが切れるなどしてイカダが団子状態になったほか、横倒しになったイカダもあった。40台余の施設でカキ養殖をする千田晃さん(30, 小友町字塩谷)は「沖漁場の9割, 岸漁場の六, 七割はやられた。北海道東方沖地震の時よりひどいぐらいだ」と話し、「三年かけて育てて一日で持って行かれた」とショックを隠せない。ホタテ養殖の佐藤好一さんは「挙げてみないとわからないが全滅に近いのでは」と落胆している。陸前高田市広田湾などではホタテやカキの養殖施設の七, 八割が被害にあった。/(以下, 「河北新報」の記事) 陸前高田市小友漁協ではカキ養殖イカダ約四百枚のうち約三百枚が, ホタテ養殖施設80台のうち70台が被害を受けた。27日は組合員ら50人が修復作業に当たった。養殖ロープ同士が絡み合い団子状態になっているイカダを切り離した。津波で3トンの固定用ブロックが移動したので, その代わりにアンカーを打ち込んで応急措置とした。

気仙町湊の養殖漁業菅野克郎さんは「いくらか海面があがった。養殖施設が心配だ」と海面を見守った。

## 6. 宮城県の記事

「河北新報」から拾い出した, 宮城県の津波記事は次の通りである。注記しないものは26日夕刊の記事である。

26日午後1時現在, 宮城県内では被害は起きていない。

気仙沼市では, 市街地と大島を結ぶ連絡船が高波で午前6時10分の始発から7時35分までの4便が欠航した。/(28日) 気仙沼市大島の外浜地区と, 同市鶴が浦や宮城県唐桑町西舞根との間の海域でカキのイカダが寄り合い, ロープが絡み合う被害を出した。

志津川では午前6時5分ころ津波の第一波が到達した。水門の鉄板に波が押し寄せたときに「どーん」という鈍い音が響いた。住民は「水の引きが早い」, 「水底が見え始めた」などと不安げな表情で見守った。

(28日朝刊) 仙台消防局は, 北海道での石

油火災鎮火のため, 消火剤6000リットルを支援提供した。

## 7. 福島県の記事

福島県の地方新聞は「福島民報」と「福島民友新聞」の2紙である。

「福島民報」(27日朝刊)

相馬市の相馬港では午前6時42分に約30センチを観測した(福島県港湾建設事務所職員の高位計測), いわき市の小名浜港では同8時23分に約20センチの津波を観測した。両港とも被害はなかった。平成13年6月のペルー沖地震の18センチ以来。近地津波では平成6年12月の三陸沖津波の15センチ以来である。

小名浜海上保安部は地震直後の午前5時過ぎから巡視艇「てるかぜ」を出動させて, 小名浜港内をパトロールし, 船舶や岸壁の釣り人に安全な場所への避難を呼びかけた。

(28日朝刊) 「小名浜一中, 津波注意報中に港周辺で写生会」

小名浜第一中学では, 教師2人の指導のもと, 生徒たちを小名浜港1, 2号埠頭間の親水空間「アクアマリンパーク」や小名浜魚市場で午前10時45分ころから写生会を行った。小名浜海上保安部の巡視艇「てるかぜ」が生徒たちを発見し, 「津波注意報が出ているので岸壁には近づかないように」と呼びかけた。写生会は午後1時半で打ち切られた。

(福島民友新聞によると写生会に参加した生徒数は四百人)

「福島民友新聞」(27日)

福島県では午前4時56分の津波注意報を発令すると同時に, 県民安全領域で警戒配備体制を敷いた。5時30分には河川整備管理グループが水防本部を設置した。

東京電力福島第一原発の3号機と6号機で地震発生時, 非常用炉心冷却水をためているプール内の水位の変動を知らせる警報が鳴った。地震の影響によりためていた水が揺れたことが確認され警報は解除された。運転に影響はなかった。東京電力は福島第一, 第二原発で津波注意報が出された間, 潮位の監視を

続けた。午前6時半と同8時前後の2回、両原発で10~20センチの潮位の上昇を観測したが、原発に影響はなく、特別な体制は取らなかった。

いわき市内では小名浜海上保安部といわき市消防本部が小名浜港などで警戒に当たった。午前6時15分頃10センチの第1波が観測され、同8時25分ごろ20センチの第二波の津波が観測されたが被害はなかった。巡視艇「てるかぜ」は七号埠頭にいた釣り人のほか、港内に停泊していた貨物船にたいして安全な場所に避難するよう勧告した。

### 8. 宮古市赤崎地区釜ヶ沢での道路浸水地点での水位測量結果

岩手県宮古市赤崎地区では、県道稲荷前・重茂線が釜ヶ沢集落のところで約300mにわたって海水が道路面に浸水し（「岩手日報」）、道路面は5cmの深さに海水が浸水して（「河北新報」）一時県道が通行止めになった。この記事に基づいてわれわれは、現地に出向き、付近住民の証言調査、および、浸水したとされる道路面の測量を行った。

現地は宮古湾の最奥部に当たっており、こ

こでは県道が海岸沿いを走っている場所で、釜ヶ沢集落との間は防潮堤によって仕切られている。現地の証言によると、海水による道路面の浸水は、この防潮堤の集落への道路の開口部の前面付近の前後300mの部分で生じた。

測量したのは2004年2月27日、12時30分頃で、測量時の平均海面から測量して道路中央部の標高は+1.93m、一番陸側端は+1.98mであった。天文潮位予報プログラムによって計算した、このときの潮位は-43cm (MSL)であったため、この数値を加え、「冠水5cm」の情報を加味して、ここでの津波浸水標高は、1.55m (MSL基準)とする。宮古ではTP 0mはMSL 0mの6cm上方にあるので、TPを基準とした標高では1.49m、となる。本書「諸機関の検潮記録」によると、田老、トドが崎の両検潮点とも、天文潮汐の影響も加味した最大潮位は、26日5時40分ごろの第1波で起きているので、釜ヶ沢での道路冠水もこの時刻に起きたものと考えられる。このとき天文潮汐は、MSL+23cmであった。したがって、ここでの津波による正味の海水上昇量（水位偏差）は、1.32mとなる。

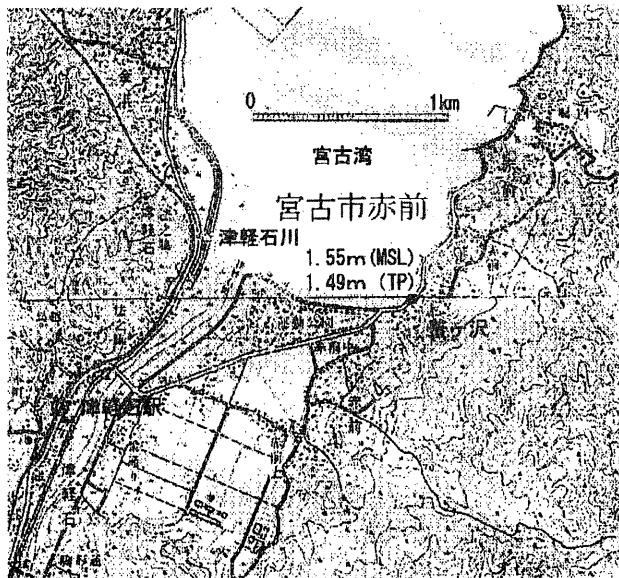


図1 宮古市赤前地区釜ヶ沢集落での県道浸水から推定した津波浸水標高

## 9. 東北地方の津波被害、および津波高さの総括表

本報告のまとめとして、東北地方で起きた今回の地震津波による被害の総括表と、津波浸水高さの総括表を掲げておこう。新聞記事

に基づくという制約上、「津波の高さ」と発表された値はどの基準からの上昇値であるのかははっきりしないが、記事の文面から見て、多くは津波による正味の水位上昇量の数値であろう。

表1 2003年十勝沖地震津波による東北地方での津波被害総括表

県名	場所	被害状況
青森県 岩手県	八戸市 県立海洋学院	定置網破損
	宮古市宮古湾	カキイカダ263大破63小破、無事無
	宮古市閉伊川	サケ川止め網 破損
	山田町大沢 浜川目地区	キイカダ40台 損傷流失
宮城県	陸前高田市小友・広田湾	ホタテイカダ 330台 損傷流失
	大船渡市赤崎	延縄式イカダ 80台 壊
	唐桑町	カキイカダに損傷被害
	気仙沼市大島・鶴が浦	カキイカダに損傷被害

表2 新聞記事に基づく各地の津波高さ

県名	市町村	場所	北緯	東経	観測時刻	津波高さ (cm)
北海道	函館	水産卸売市場	140 43 32	41 46 07	x x	70
青森県	むつ市	関根浜	141 13 43	41 22 04	7 47	50
青森県	八戸市	港	141 32 27	41 40 31	5 44	60
青森県	八戸市	港	141 32 27	41 40 31	8 17	100
岩手県	宮古	測候所	141 58 18	39 38 27	5 44	60
岩手県	宮古市	閉伊川河口	141 58 02	39 38 12	5 53	70
岩手県	種市町	漁港	141 43 26	40 24 18	5 6	70
岩手県	久慈市	玉の脇	141 48 01	40 11 14	7 25	132
岩手県	久慈市	小袖	141 51 08	40 09 55	x x	50
岩手県	田野畑村	島の越	141 56 52	39 54 44	x x	50
岩手県	野田村	野田港	141 50 09	40 06 49	x x	50
岩手県	普代村	田名部	141 54 37	40 00 27	x x	50
岩手県	田老町	田老港	141 58 33	39 43 47	x x	60
岩手県	山田町	船越	141 59 07	39 25 16	x x	42
岩手県	大船渡市	大船渡	141 43 38	39 03 44	5 49	20
岩手県	釜石市	釜石	141 53 27	39 16 08	5 48	50
岩手県	宮古市	赤前	141 57 35	39 34 58	x x	132
岩手県	陸前高田市	只出	141 42 47	38 58 56	x x	30
岩手県	陸前高田	小友両替	141 41 06	38 59 34	x x	90
岩手県	大槌町	漁港	141 55 19	39 21 10	x x	20
福島県	相馬市	相馬港	140 57 34	37 49 59	6 42	30
福島県	いわき市	小名浜	140 53 52	36 56 25	8 23	20
福島県	楢葉町	第2原発	141 01 50	37 18 49	x x	20



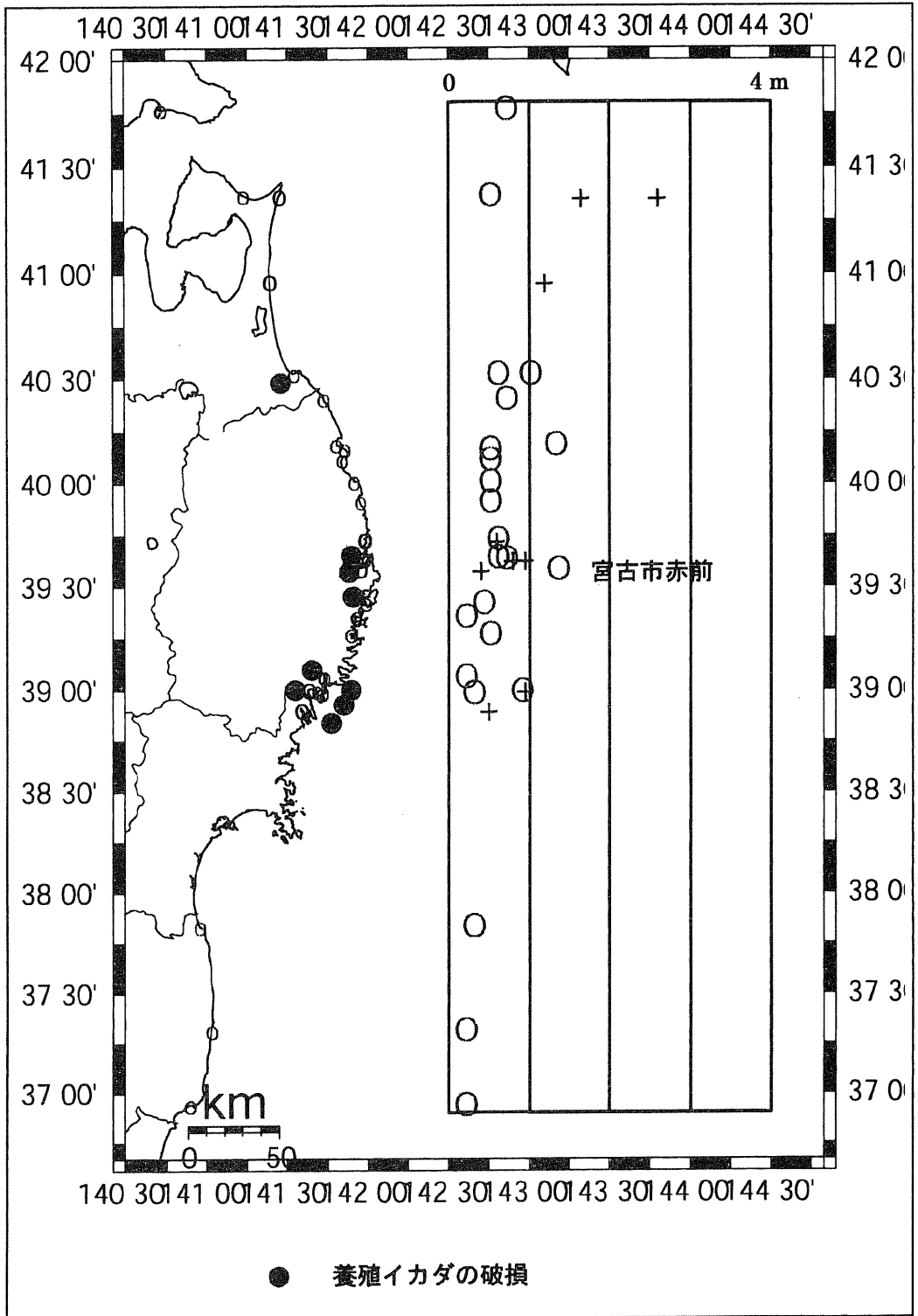


図2 東北地方の津波浸水高さと、養殖イカダに破損を生じた地点  
 ○ は新聞記事に基づくもの、+は本書の他の報告調査に基づくもの